

建築保存概念の生成史

清水重敦（京都工芸繊維大学准教授） 著

定価 24,150 円（本体 23,000 円＋税）

B5判上製函入 本文 440 頁 挿図 59 点

ISBN 978-4-8055-0697-4 C3052

初めての本格的な建築保存論

藤井恵介（東京大学教授、日本建築史・文化財保存学）

「建築の保存」というと、建築という広い領域のごく一部分であって、特殊な分野であると思っている人が多いと思う。しかも、古代・中世という遠い過去の建築が対象で、優れた修理技術によって支えられた安定した世界ではないか、と。しかし、清水重敦氏は、それを徹底的に近代日本の建築世界の内部に秘められた固有の課題として捉えた。新たに発見、再検討された重要なテーマは少なくない。伊東忠太、関野貞、松室重光、日本建築学、建築保存理念、解体修理、復元への指向性、修理技術者の出自、調査方法、実測図、建築写真の成立、などなど。すなわち、建築学、建築史、建築保存の開拓者たちの間で共有されていた保存の構図と常識と幻想について、大胆な仮説と精密な論証を駆使して一枚ずつペールを剥がし、実態を解明していったのである。

かくして、本書は、建築保存学のみならず、日本の近代・現代の建築史研究において、避けては通れない一冊となった。

日本における建築遺産の保存は、精緻かつ科学的な体系を有しながら、解体修理の手法などに伝統を色濃く残してもいる。この特質がもつ意味を明らかにすべく、日本近代において建築保存概念が生成していく過程を近世からの継承と転換として論じていく。文化財保存の史的再読を通して日本の建築保存の意味の拡張を意図しつつ、近世近代建築史として伝統と西洋の混濁の具体的様相を描き出し、保存から日本と東アジアの新たな建築史叙述を志向する。

目次

序論

第Ⅰ部 建築における「過去」と近世―近代

第一章 建築における過去

日本近世―近代における継承と転換の位相

第二章 春日座大工の持続と終焉

第Ⅱ部 「日本建築」と「保存」概念の同時生成

第一章 写真と日本建築

第二章 運用実態から見た古社寺保存金制度の特質

第三章 古社寺保存金制度の成立と終焉

第四章 伊東忠太と「日本建築」保存

第五章 古社寺保存会草創期に作成された建造物等級表について

第六章 古社寺保存法における指定制度の運用と「伝統」像の形成

第Ⅲ部 「日本建築」への介入―古社寺修理

第一章 日本の建造物修理

第二章 関野貞と古社寺保存

第三章 松室重光と古社寺保存

第四章 古社寺修理における技術者の系譜

第五章 日韓における黎明期の建造物保存修理

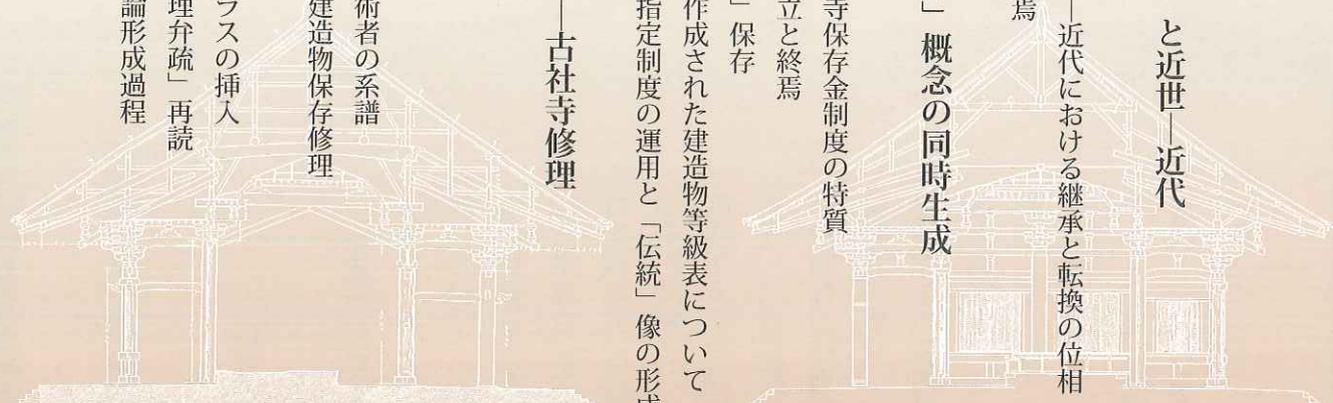
第六章 日本建築と実測図

第七章 古社寺修理におけるトラスの挿入

第八章 大江新太郎「日光廟修理弁疏」再読

第九章 明治期建造物修理の理論形成過程

結論



唐招提寺金堂（左：修理前 右：修理後）

【著者紹介】 清水重敦（しみず・しげあつ）

1971年東京葛飾生まれ。1993年東京大学工学部建築学科卒業。1999年同大学大学院工学系研究科博士課程単位取得満期退学。2005年東京大学より博士（工学）の学位授与。独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所景観研究室長、京都大学大学院人間環境学研究科客員准教授を経て、2012年より現職。

お取り扱い

中央公論美術出版

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834